

The Gallery voice

NO-50

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2012.9.21
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

作品タイトルからみたシリーズ「免疫」

金城 満

このシリーズは、映像・音楽・絵画のハイブリッドな作品群で構成されている。
ここではその全体像を、出品絵画26点の「作品タイトル」のコラージュで綴る。

2012年 あれから40年

「理解を求める人々」がまたやって来た
「理解を求められる人々」はその事が理解出来ない
そしてまた「長い話」が始まり
「はじまらない話」は今も始まらない

「二つの鏡」と「後ろの鏡」
立て板に水の「二枚舌」 二枚の板で板挟み
したたか 知ったか 下心

「夜のうちに」「うわさ」は蒔かれ
「蚊帳の外」には「いらっしやい」
「窓の外」には「錆びたドア」

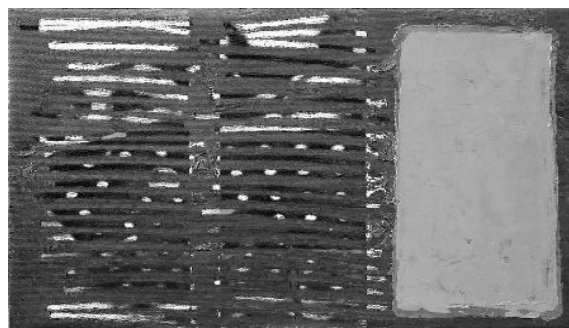
まわる観覧車 「アメリカ村」は誰の村
「村のアメリカ」は山の中
「恥ずかしい話」は藪の中

「リゾート計画」 乗り捨てパットの交通渋滞
癒されたい人々のツアーは格安ニッキュパッ
誰も知らない 上りツアーのニッキュパッ

体質改善 生活改善 教育改善
「止まらない輪郭」は「問題の比率」を肥らせ
「隠蔽体質」は液状化

かつて 「にわか雨」が小学校に降り
大学には「ときどき雨」が降る
「必要なドア」にはノブが無く 「選択肢」は三つだけ
「四角い太陽」が「壊れたブラインド」に降り注ぐ

2012年 あれから40年



「必要なドア」 30 × 53 cm、2012年、綿布、デジタルプリント、油彩

(「金城満の仕事」は<http://mkmk.p2.bindsite.jp/mk/index.html>です。)

(きんじょう みつる／美術家)

身体と記憶

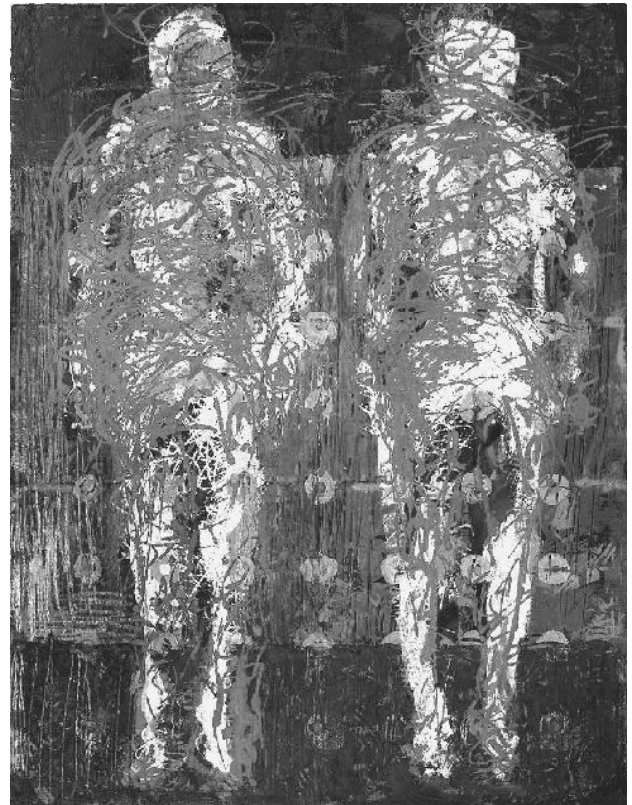
田場裕規

◆ある酒席でのこと。いつも微笑みの絶えない太陽のような同僚女性教員の心根の温かさについて、私は「Aさんの裏表のない性格は……」と彼女の明朗さを褒めそやした。これは、心からそう思ったからだったが、B氏は食い下がった。「Aさんが裏表だって！そんな前近代的な考えの言葉でAさんのことを言うな！」と一喝された。Aさんのありのままを、正面から受けて、彼女の呼吸をも共鳴させているB氏にとって、「裏」と「表」で物事を見ている小生の発言は、断固として相容れない感覚をもたらしたのだろう。その時B氏は、裏表ではなく、柔らかく薄い「皮膚感覚」だと訂正を迫った。皮膚の下にある情感がじんわりと滲み出る温かさがAさんそのものであり、Aさんには「裏」も「表」もないというのだ。表面の反対が裏面という感覚のことを「前近代的」と冷笑する奥には、生身の身体を分かち価値観への違和感を見だし、そのことに翻弄され続けることへの批判がB氏にはあったのである。依存し続けることによって、生身の身体は、知らず知らずのうちに二項対立式の思考に飼い慣らされ、無意識のうちに「表」と「裏」を分かちつことを飲み込んできたことを思うと、B氏の見つめていた世界はむしろ人間そのもの、或いは身体そのものであったと考えられる。

◆シリーズ「免疫」の根底には、所謂「前近代的」世界観への批判がある。しかも、沖縄をめぐる諸問題について、さまざまの二項対立式の思考の危うさをもたらす思考停止を読むことができる。二人の人間の立ち姿は、自立していながらも全身をウィールズに侵されている。一方は前を向き、一方は後ろを向き、互いの交わり合いは「無化」されたまま、交わることはなく、ひたすらウィールズに抗いながら二本足で立とうとする。知らず知らず免疫だけが飼い太らされ、いつしか皮膚に残してきた感覚を喪失していく。さらに身体に刻まれた様々な記憶は、ウィールズに抗い免疫を作ることによってデリートされ続け、いつしか生身の身体の悲鳴だけが残されていく。沖縄をめぐる諸問題という言い方が、すでに身体に刻まれた記憶の喪失であることに気付くはずだ。しかし、記憶は喪失されても、肉に刻まれた悲鳴は消えないのである。

◆沖縄戦体験者の心的外傷後ストレス障害（PTSD）＝トラウマが報告されている。80歳を超えた高齢者が、戦後60年以上も経ってから、不眠や原因不明の足の痛みなどに悩まされているという。戦後、子育てや仕事によって紛れていた悲しみの記憶が、80歳を超えた今、様々な身体症状となって苦しめているというのである。戦後の動乱期は、生きるのに精いっぱい、皮膚に残した悲しみの記憶は、免疫によってデリートされ続けてい

た。しかし、迫ってくる自分自身の死を確かに自覚し始めた今、身体は悲鳴をあげはじめているというのだ。トラウマの治療は、記憶を掘りおこすところから始めなければならないが、すでに高齢の沖縄戦体験者には、複合する免疫によって、その原因を追求することが困難になっている。ひたすら、身体の悲鳴に苦しめられなければならないことは、沖縄の現実である。



「恥ずかしい話」 65×50 cm、2012年、板、油彩、シルクスクリーン、顔料、ニカワ

◆前を向く人、後ろを向く人。交わることのない両者を覆い尽くすウィールズは、いったい何なのだろう。目には見えないウィールズレベルで身体感覚が改変されているのであれば、ある種のウィールズへの抗体は、イイモノとも考えられる。しかし、前を向く人と後ろを向く人の相剋が辛く、苦しく、厳しく感じられるのは、私だけであろうか。両者の身体に残された記憶は、デリートされている。今は、悲鳴だけが身体に刻まれ、その〈声〉さえも聞き合えない関係になっている。ある時は、整序されたポイントの中に立たされ、自立という仮想現実の夢を無理やりに見せられ、夜のうちに恥ずかしい話を聞かされるのであれば、早く夢から醒めたほうがいいのではないか。〈声〉が〈声〉として聞けている間は、まだ救いようがある。これが、聞けなくなったとき、本当に致命的なトラウマの連鎖が始まるのである。代理受傷は最も恐ろしい。

(たば ゆうき／沖縄国際大学総合文化学部専任講師)

他と交わること：金城満氏の作品にみる構造的「2」

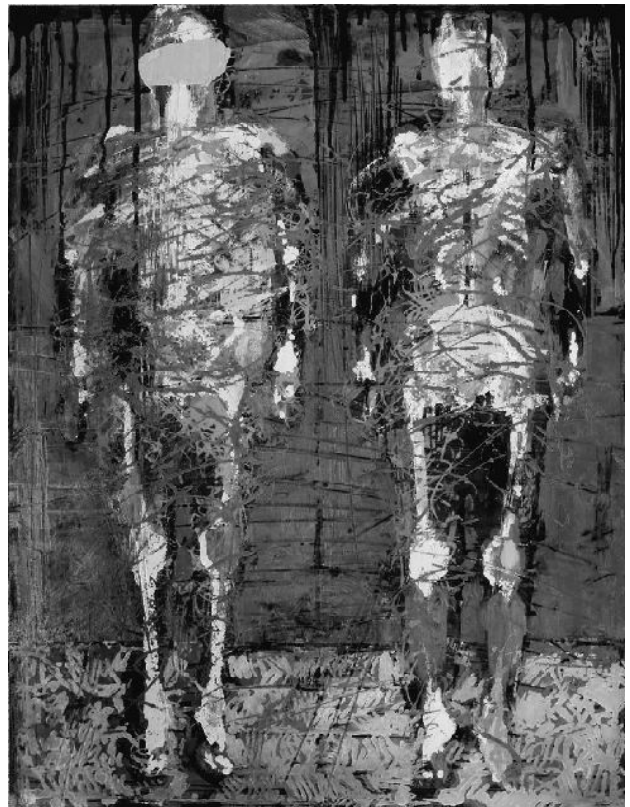
居村 匠

今回、画廊沖縄で展示される金城満氏の作品において、最も目を引くのは、2つの人型がシルクスクリーンで描かれた10の連作であろう。これらの作品群は、構造的に「2」という形式を有している。どの作品の画面も、左右に「2つ」の人型のイメージが、背景には色面が刷られており、その上からブラッシュ・ストロークを効かせたタッチが、覆うように描きこまれている。この2つのイメージは、一方を手前、もう一方を奥を向く「2人」の人物像だと見ることもできるし、同一人物の背、腹側の「2重」の姿だと見ることもできるだろう。だがどちらにしても、人型のイメージは激しいタッチやひっかきにより、その輪郭を確固としては保っておらず、内外の境界があいまいなまま提示されている。

一方で、これらの作品群からは、金城氏の医学的、生物学的関心を見て取ることもできる。人型のイメージからは、白い骨が透けており、レントゲン写真を思わせる。この時、画面上のタッチは、情報の読み取りを阻害するノイズとも取れるかもしれない。今回の展示のタイトル「免疫」ということから考えるに、金城氏はこれらの作品において、一貫して身体の内부를問題としていることが分かる。また映像作品に見られる微生物的イメージも、金城氏の生物学的関心を裏付けるだろう。

そもそも免疫とは、病原体の侵入などから自己を守るための、生体防御のしくみである。免疫系が十分に機能することで、生物は内と外を区別し、自己を保護することができる。しかし、金城氏の作品に見られる「免疫」とは、そのような内と外を明確に分節し、他を排除する攻撃的な働きではない。これらの作品群が扱うのは、身体の内部分の問題だけでなく、より正確に言うならば、身体の内外部の関係性の問題だからである。本来の意味での免疫が、外部からの病原体などの侵入を想定しているように、金城氏の「免疫」は、自分以外の「他者」を想定している。この「免疫」は、個の世界、単一の存在だけでは生じない。自分以外の他者、単数でなく複数の間の関係性において生まれるある種のコミュニケーション（あるいはディス・コミュニケーション）、他者との出会いに対する私たちの対応こそが、この「免疫」なのである。それゆえ金城氏の作品は、構造的に「2」を示すのである。それは自-他、内-外、敵-味方、私たちの遭遇するあらゆる他者との接触を暗示するミニマルな数である。そしてこの時、人型のイメージに見られたあいまいな輪郭、ノイズとしてのブラッシュ・ストロークは、まったくポジティブに読み替えることができる。人型を覆わんばかりの激しいタッチやひっかきは、他との接触、そしてそれへの応答の比喩として、読みとることができるであろう。人型のイメージの内外は、はっきりと分節できないし、様々な色と形態が混ざり合い、あい

まいな様相を呈している。だが本来的に言えば、私たちの身体と外界は不可分なはずである。私たちは、呼吸をし、食事をし、外界の他者や出来事と関わりながら社会の中で生きている。私たちの自我とは、常に他者との接触によって変化し、形成されているものである。つまり私たちは身体、精神の両面において、外部との関係性において存在している。ゆえに人型のイメージは、外界との明確な境界線を持たずに形成されている。それは私たちが他と関わり、関係性の中で生きていることを示しているのだ。この時、レントゲン写真のような骨格のイメージ上を、ノイズとして覆っていたブラッシュ・ストロークも、その意味を反転させる。激しいタッチが、他者との接触、交渉、対話の比喩だとするならば、骨格を覆う行為は、それによる内面の形成だと言えるだろう。



「長い話」

65×50 cm, 2012年,板、油彩、シルクスクリーン、顔料、ニカワ

もう一度繰り返そう。金城氏の作品の示す「免疫」とは、他を排除し、内外を明確にする働きではない。それは他と関わり、変わりながら、自己を形成していく働きなのである。金城氏の作品は、「2」を示す。自分を自分足らしめる豊かなコミュニケーションは、個と個、1と1の間の関係性の中に生まれるのだ。

(いむら たくみ/沖縄県立芸術大学芸術学専攻3年)

MITSURU KINJO



金城 満について

金城満氏は1959年那覇生まれ。琉球大学大学院修了。高校の美術教師の職のかたわら精力的に美術活動を続けている。画廊沖縄では2009年から3ぶりの個展となる。

昨年の11月頃だったであろうか、久しぶりに金城満氏のインターネットWEBサイト「金城満の仕事」(<http://mkmk.p2.bindsite.jp/mk/index.html>)を開いて見て驚いた。新作シリーズ「免疫」の動画12本が音曲入り(作曲・金城満)で公開され、同名のタブロー(絵画)が12点がUPされていた。WEBサイト展のみで公開されるのはあまりにも惜しい気がした。何よりも音楽と共に自在に踊る(変化する)造形に惹かれた。PCを筆のように使いこなす金城氏のハイブリッド作品の誕生である。

動画作品シリーズ「免疫」は、ウイルスと思われる色や形のモノが軟体で流動する。また液状のしつこいネバネバしたモノが見える。飛び跳ねるモノ、食い込むモノ、上から覆い被さるモノ、隙間に侵入するモノ、勝手に越境するモノ、性格も種類もさまざまである。それらの因子によって犯される造形(本体)。病んでいく本体、ショックで失神する本体、泣きわめく本体、渾然となり同化する本体、笑う本体、狂乱し肥満化する本体、単純な形状の本体(主体)と思われる造形体が画面上で音楽のリズムに合わせるように、さまざまな表情で動き出す展開が興味を引く。時に重力のかかった空間で、上空から毒気のある物体やドス黒

い液物が落下し、本体に襲いかかる。またある時は、微生物やウイルスのように本体内分に侵入し、内部自体が変色(変容)し同化していく。タイトルの「免疫」が示すように、外から侵入してくるある種のウイルス(ばい菌)が、本体の営みを破壊攻撃を繰り返す。そのうちに本体の原型の内部が変容した形に納まる。しかし、しばらく経つと更なる因子が侵入する。さまざまなウイルスが襲っては変化し、襲っては体質とカタチが変わっていく。3分間の短い動画のストーリーは、まるで病のガン細胞に犯された人体の病理現象を拡大して覗いているようである。

社会状況や歴史的事象に、身体性や五感を過敏に反応するアンテナを持つ金城氏。この現象を沖縄社会の暗示的なメタファーとして捉えることが出来たと言えよう。本体=沖縄、ウイルス=外部からの情報として置き換えると分かりやすい。本体と外部との関係性は本体の「心性」の在りようとも置き換えられる。金城氏の皮膚感覚を伴った思考の深さと造形の魅力、デジタルのテクノロジーと作品の質の高さに目を奪われ、脳髄を刺激される動画作品である。

さて、今回は復帰40年節目の企画「依存-Independent」のテーマに臨んでもらった。展示はあのWEBサイト展で公開した動画作品と同シリーズの絵画12点で十分と考えていた。40年の節目に、戦後処理と現状のざくしゃくした沖縄とヤマト政府の関係を問い、今後の課題と今企画テーマに込めると安心していただいていた。しかし、私の予測は簡単に裏切られた。動画作品はそのまま会場公開となったが、新たに26点の絵画を制作した。夏の午後、金城氏の制作の現場に足を運んだ。イーゼルに立てられた新作の画面にヒリヒリする痛みのような感覚に襲われた。2体の人体シルエットに異様にからみつくモノ・・・一体何モノであろうか・・・。自問自答しなければならぬ心境に陥った。対面して向き合う事がない2体、左手片方はこちら側を向き、右手片方は真逆の向こう側を向いている。2体はどのような関係か。会話が成立しているのか。輪郭が明瞭ではない。友人か、夫婦か、性をそぎ落とし人体という2体が立っているだけだ。被害者同士か、加害者同士か、強制者か、受容者か、何となく危うさが漂う。

今企画テーマ「依存-Independent」に相応しい作品の提示となった。金城氏の畏にうまく掛かってしまった。おそらく、前述の動画作品の空間に漂うモノの可視化と具体化であり、あの執ように攻撃するウイルスの可視化であると。同時に、あえぐ本体の苦しみ、狂乱する本体の声の可視化でもある。復帰40年、いや戦後67年、それとも前近代の400年に累積した悪しき「免疫」体質の因子か、または抗体かもしれない。(画廊主/上原誠勇)

金城 満【kinjo Mitsuru】

- 1959年 沖縄県生まれ
琉球大学大学院修了
- 1986年 第15回県展優秀賞
- 1987年 第39回沖展賞
- 1988年 第17回県展知事賞
- 1990年 第一回あけみお展金賞
- 1994年 「繁多川1-21-52」那覇市映像祭優秀賞
- 1999年 記録映像『「石の声」表現行為が導きだすもの』
第8回下中教育映像助成金
- 2001年 平成13年度 松下視聴覚教育研究財団
第27回実践研究助成（共同研究）
- 2003年 平成15年度 松下視聴覚教育研究財団
第15回理事長賞（共同研究）
- 2007年 沖縄タイムス芸術選賞（奨励賞受賞）

個展

- 1986年 「レスポワール展」銀座スルガ台画廊／東京
ステーション5ギャラリー／沖縄（那覇市）
- 1987年 アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
沖縄大学市民ギャラリー／沖縄（那覇市）
- 1988年 アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
- 1989年 「チルダイとハーダーリの不協和音」画廊沖縄／沖縄（那覇市）
「くるくるサイクル」アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
- 1991年 「管理社会・粹々するときしないとき」アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
- 1992年 「痕跡のあと」GALLERY WORK-Ⅱ（画廊沖縄）／沖縄（那覇市）
- 1994年 1月、「表面と裏面」GALLERY WORK-Ⅱ（画廊沖縄）／沖縄（那覇市）
12月、「電脳版画」GALLERY WORK-Ⅱ（画廊沖縄）／沖縄（那覇市）
- 1995年 シリーズ「電脳水脈」アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
- 2000年 シリーズ「鉄の座標」GALLERY WORK-Ⅱ（画廊沖縄）／沖縄（那覇市）
- 2006年 4月～、シリーズ「音の化石」／WEB展
11月、シリーズ・ドモリエ「ことばのカタチ」画廊沖縄／沖縄（南風原）
- 2009年 1月、「Sweet400」画廊沖縄／沖縄（南風原）
12月、Triple sugar-「ぬげからの音」佐喜真美術館／沖縄（宜野湾市）
- 2012年 9月、シリーズ「免疫」画廊沖縄／沖縄（南風原）

グループ展

- 1993年 「二人展」アートギャラリー茶絵羅／沖縄（那覇市）
- 1994年 「日・韓交流美術展」那覇市民ギャラリー／沖縄（那覇市）
沖縄コンベンションセンター／沖縄（宜野湾市）

プロジェクト

- 1995年 沖縄県女性総合センター綴帳／原画制作
- 1996年 『「石の声」表現行為が導きだすもの』佐喜真美術館／沖縄（宜野湾市）
- 1997年 「迷い鯉」佐喜真美術館／沖縄（宜野湾市）
- 1999年 「鉄の記憶～加害の痕跡」佐喜真美術館／沖縄（宜野湾市）

<制作ビデオ> 「沖縄の伝統工芸」「家族の肖像」「繁多川1丁目21-52」「石の声～表現行為が導き出すもの」 <作曲> 植物シリーズ、犬の情景、映像のための音楽2、ドドモリングなど <版画シリーズ> 「表面と裏面」「電脳版画」「痕跡のあと」 <収蔵> 佐喜真美術館